
D & M

武道家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D & M

【Nコード】

N8060Q

【作者名】

武道家

【あらすじ】

日本最大の極道「真藤会」。彼らが裏から支配し、その本拠地としている千葉県大迫市。

そこに一人暮らしをしている高校生「室井晃司」。

そんな晃司が偶然から、ひとりの少女を保護したことがきっかけで、真藤会、警察、さらに闇の商人が動き出す。

平穏を望む晃司に望まぬアクシデントが降り注ぎ、多くの人たちとの出会いが待っていた。

第一話 出会い（前書き）

アクション的なものを目指しています。

更新が滞るかも知れませんが、気長に見てくださると幸いです。

第一話 出会い

1

一月もそろそろ終わる頃。

買い物帰りに寄った電気屋のテレビで、一つのニュースが放送されていた。

人が賑わうカフェで事件は起きた。客で店内が賑わうお昼ごろ。店内で大規模な爆発が起き、死傷者は二桁を数える。事故の原因は警察が捜査中。

そんな原稿を読むニュースキャスターの顔を見つつ、室井晃司は呟く。

「今月に入って三回目……事故にしちゃ、ちょっと異常だろ」

スーパ―の袋を両手に持ち、晃司はその場を立ち去った。

翌日

東京とはいえ、寒さの厳しい冬。

白い息を吐きながら、晃司は自身が通う大迫高校に向かっていた。いつもの通学路を通り、同じ制服を着た生徒と共に歩く。

そんないつもと変わらない登校をしていた。けれど、少しだけ違うことがあった。

校門の少し手前。白い乗用車が停まっていた。

ぱっと見は一般人が乗っているように見える。だが、辺りを警戒している様子を見る人が見れば、一般人ではないことがわかる。

「真藤会の人じゃない……？」

晃司は、この街を本拠地としている極道の組員の特徴を思い出す。真藤会は東日本を代表する極道で、その派閥は世界レベルまで広がっていると言われているが、全貌は警察ですら把握しきれてないという。

そんな真藤会の組員は、その証として、睡蓮の花を模ったバッジを胸に付けている。

晃司は車の近くを通るときに、怪しまれない程度の動きで、車の中を探る。

「バッジは付けてないか」

晃司は車を通り過ぎ、校門を抜けると、そう小さく呟いた。

バッジを付けていないのは、真藤会ではない『堅気でない人間』か、それとも身分をばれるわけにいかないのか。

「どっちにしたって面倒事にはかわらない……」

晃司はもう一度ため息を吐いた。

そうこうしている内に、晃司は下駄箱までくる。

晃司は内履きに履き替え、廊下を歩き始める。だが、廊下に人だかりができていたため、歩みは止まってしまう。

「なんだよ朝から……」

「噂の高校生探偵がまた事件を解決したらしいぜ」

後ろから聞こえてきた声に晃司は肩をすくめながら振り向く。

後ろに居たのは長身でガタイの良い男だった。

「おはよう。義樹」

後ろに居たクラスメートの橘義樹に挨拶すると、晃司はあきれたように言う。

「他校の生徒の記事なのに……まるでアイドルだ」

「イケメンだしな。それに、警察幹部の息子らしい。加えて成績、性格ともに良好の完璧さ。女も騒ぐさ」

義樹はそういうと、掲示板を指差す。

そこには、一面にカメラ目線で撮られた少年の顔写真が載った校内新聞が張り出されていた。見出しには『あわや迷宮入り。当峯高校の高校生探偵大活躍』と書かれていた。

「安い見出しだろ？」

「新聞部に怒られるぞ」

「事実だろ？」

「……例の連続爆破か？」

晃司は義樹の言葉を流すと、解決した事件のことを聞く。

「いや、突発的に起こった傷害事件らしい。それに”連続爆発”だぜ」

義樹の訂正には答えず、晃司は人ごみをかき分けて、教室へ向かう。そのあとをすぐ義樹が追いかけてくる。

どうにか人ごみを抜けたあと、晃司はうんざりしたように言った。
「まったく……いい迷惑だ……」

2

学校が終わり、晃司は義樹とともに近所のゲームセンターに来ていた。

といつても、晃司がゲームをやるわけではない。

「UFOキャッチャーに何千円掛けてるんだ？」

UFOキャッチャーに真剣に向かう義樹に晃司は呆れたように声を掛ける。

「この虎を取ったら終わる」

義樹は晃司にそう返事を返しながら、また硬貨を投入する。

晃司は義樹の奇行にため息を吐くと、理由を尋ねる。

「なんでぬいぐるみを集めるんだ？」

「わかってないな。もうすぐ二月だ。二月と言ったら？」

義樹の質問に晃司は肩をすくめて答える。

「雪」

「これだから北信越は……二月と言ったらバレンタインデーだろ？」

義樹は嘆くように晃司に言う。晃司はそれを聞いて義樹に質問する。

「それで？ それとぬいぐるみが何の関係がある？」

「まあ待て。バレンタインデーでチョコを貰ったらどうする？」

義樹に質問を返され、晃司は少し考えた後、一言呟く。

「お返しかな？」

「ビンゴ。女の子はぬいぐるみが好きだ。これでオレの好感度アップは間違いない」

どうだといわんばかり言ってくる義樹に、若干引き気味になりながら、晃司は義樹に尋ねる。

「ホワイトデーは……3月だぞ？」

「わかってない。本当にわかってない。お返しは早いほうが良いに決まってるだろ？ 貰った後に部屋に招いて、好きなぬいぐるみを持っていつていいよって言うんだ」

義樹の得意げな顔を見て、晃司はあることに気づく。

「ああ。だから彼女がいないのか」

晃司は義樹に気づかれないように呟きつつ、そろそろ不毛なこの時間を終わらせるために、義樹が狙っているぬいぐるみを瞬時に観察し、アドバイスをする。

「義樹。その虎、頭じゃなくて足を引っかけると落ちるぞ」

「本当かな？ 出来れば金の消費は最小限に抑えたいんだが」

今更なことを言う義樹のために吐きつつ、晃司は自分の財布から百円を出して、義樹をどける。

「どけ。オレが取る」

「マジで？ 俺にくれる？」

「馬鹿かな？ 金を出すのはオレだ」

晃司はそういうと、スティックを操作する。

義樹が狙っていた虎は、ぱつと見は頭を押せばすぐに落ちそうな雰囲気を出しているが、よく見ると、虎の足が他のぬいぐるみに引っかっているため、そこを引っかければ落ちる。そう判断した晃司はアームを足に引っかける。

今までの支えが失われ、バランスが崩れた虎は穴へと落ちていく。

「おおーやるなあ」

「お前は観察力が足りないんだよ」

自分のカバンに先ほど取った両手ほどの虎のぬいぐるみを入れつ

つ、晃司は義樹に言う。

「観察力ねえ。ん？」

帰り支度を始めた晃司を見て、自身も帰り支度を始めていた義樹の携帯が鳴る。義樹は携帯を開くと、顔をしかめる。

「どうした？」

「今日は外食の日だったの、忘れてた」

片手を額に当て、上を見る義樹。そんな義樹の言葉を聞いて、晃司は入口を指差す。

晃司の対応に義樹はため息を吐くと、ぬいぐるみが大量に入った紙袋を両手に持って勢いよく走りだした。

そんな義樹の背中を見ながら、晃司もゲームセンターを後にする。

3

街のはずれにある10階建てのマンション。その最上階に晃司の姿があった。

晃司の生まれは新潟県で、この街の生まれではない。晃司は高校に通うために上京してきた人間なのだ。そのため晃司は今、一人暮らしなのだ。

そんな晃司は高校生の一人暮らしとしてはありえないほど広々とした部屋にカバンを置くと、制服を脱いで、ジャージに着替えると、日課のランニングに出かけた。

部屋から出てすぐの路地で、晃司は真藤会の組員を見かけた。この街は真藤会に支配されているといっても過言ではない。それは決して表に出ないが、少し街の奥に入れば、そこには真藤会の組員が多くいる。

街をほぼ一周するコースをこの街に来てから毎日走っている晃司は、この街の状況をよく知っていた。

この街の状況は真藤会と表裏一体だからだ。

そのため、晃司はここ数日の街の異変を感じ取っていた。ここ数

日、街の至るところに居る組員たちが殺気立っていた。それは遠目で見ただけでわかるほどで、晃司はすぐに何かがあったことに気づいた。

だが、今日は少し様子が違っていた。

「慌ててる？」

それはランニングを続けて、街の都市部に近付くほど、顕著になっていった。

今までは何かを警戒するような様子だったが、今日はしきりに携帯で連絡を取ったり、聞き込みをしたりと、何かを慌てて探しているようだった。

そんな組員を観察していると、晃司の頬に水滴が当たる。

「そう言えば夜から朝まで雨だったっけ……」

晃司はそういうと、組員の観察を止めて、雨が本格的に降り出す前に帰るために、走るスピードを上げた。

本降りが始まる前に、なんとか部屋までたどり着いた晃司は、夕食を用意するために、冷蔵庫を開ける。

「……材料買ってくるの忘れた」

晃司は外を見るためにカーテンを開ければ、外は土砂降りだった。晃司は、少し思案した後、着替えを用意する。そして部屋の暖房を入れて、傘をもって近所のスーパーに足を運んだ。

だが、晃司がスーパーに向かう道のり。その僅かな距離で、晃司は一つのトラブルに出会った。

晃司が何を買おうか考えていると、反対側から一人の少女がやってきた。

自分と大して年の変わらなそうな少女が、傘もささずに一人で歩いている事に、晃司は不信感を抱いた。さらに、少女がフラフラと歩いていることに気づいた晃司は、見過ごせずに少女へ駆け寄る。

「あの……大丈夫ですか？」

晃司の言葉に敏感に反応した少女は、ずぶ濡れのまま、晃司を見上げる。

背中まである髪が肌に張り付き、顔にも濃い疲労と警戒の色が見えた。晃司は頭の中で真藤会の慌てぶりを思い出した。

「もしかして、誰かに追われてるの？」

その言葉を言い終わるとかどうかの所で、少女が晃司に倒れこんでくる。

「……たす……けて……」

晃司の顔を見ながら、少女はそう呟いた。晃司はその言葉を聞いて、自分が厄介事に巻き込まれたことを悟った。

第二話 始まり

1

翌日。

晃司は、昨日、ずぶ濡れになっていた少女を保護した。倒れた少女が触れただけでわかるくらい熱を出していたからだ。そんな少女を抱えて、晃司はとりあえず部屋に戻った。

部屋に戻った晃司は悪いとは思いつつも、少女の濡れた服を脱がし、自分用に用意しておいたスウェットを着せ、ベットに寝かせた。氷枕を用意し、濡れたタオルを額に当て、二時間ごとに交換する。そして、そうこうしている内に太陽が昇り、学校に行かなければならない時間になっていた。

「……あゝもうこんな時間か」

ベットの横で椅子に座っていた晃司は眠い目をこすりつつ、開いたままのカーテンから見える光を見た後、晃司はベッドで眠る少女に目をやる。一晩でだいぶ熱が下がったらしく、昨日ほど辛そうではない。

晃司は少女の様子を確認すると、自分の携帯を取り出し、電話帳から大迫高校に掛ける。

電話に出た男の教師に風邪で学校を休むことを伝える。

「学校まで休んで何やってんだか……」

晃司は少女を見ながら呟くと、朝ご飯の準備をする為に椅子から立ち上がる。

キッチンに向かった晃司は、冷蔵庫を開けて頭を抱える。

「そう言えば材料買ってない……」

晃司はため息を吐くと、少女の様子を伺いに行く。いまだに眠り続ける少女の顔を見て、晃司は外に出る準備をする。ジャージの上に着る羽織り、財布と携帯をポケットに入れる。

「置手紙でも置いてくか」

晃司はメモ用紙を取りだすと、「動くな」と少女に伝言を残す。
晃司は部屋にあるテーブルにメモを置くと、外に出かけた。

2

朝早くからやっているスーパーもないため、晃司はコンビニに行く、弁当やパンなどを買う。

そのコンビニから部屋に戻るまでの間、晃司は周りの様子を観察する。

ランニングしてる老人、登校してる学生、交番に立っている警官。そして。

「表路地にまで出てきたか……」

辺りを見渡している真藤会の組員を見て、晃司はそう呟く。

怪しまれない程度に晃司は真藤会の様子を見つつ、晃司は真藤会の狙いを考える。

何かに追われる少女と、何かを慌てて探す真藤会。この二つだけなら、あの少女は真藤会に追われていると考えることができる。だが、晃司はここ数日の真藤会の様子が気になっていた。何かを警戒していた真藤会には”敵”がいる。

「真藤会に喧嘩を売る奴がいるなんて……」

晃司は自分の考えが行きすぎだと考える。だが、考えれば考えるほど辻褄が合う。敵がこの街に侵入してきたなら、ここ数日の真藤会の警戒ぶりは理解できる。

晃司はそう考えつつ、いつの間にか着いていた部屋のカギを開ける。

「……なら、あの子は敵を知ってる？」

部屋のドアを開けながら、晃司はそう呟く。

そこで晃司は思考を閉じる。部屋の様子が違っていったからだ。

「キッチンに誰かが入った……？」

晃司は買ってきた物を置いて、ダイニングキッチンの様子を観察する。荒らされているわけではないが、少なくとも、晃司が部屋を出た時とは様子が違う。

晃司は、ダイニングキッチンから続く二つの部屋の内、一つに向かう。少女を寝かしておいた部屋だ。

晃司はその部屋のドアを少し開き、中の様子を探る。

中の様子は晃司は顔をしかめる。ベッドで寝てるはずの少女が居なかったからだ。

「ちっ！」

晃司は中に入り、部屋の中を見渡す。部屋は物色された形跡があり、自分の身分証明証などが勉強机の上に置かれている事に晃司は舌打ちをする。

「迂闊だった……とりあえず、連絡するか」

携帯を取り出し、電話を掛けようとする晃司は、後ろからの気配に振り向こうとする。

だが、それは一つの声によって妨げられる。

「動かないで」

晃司は聞き覚えのある声に、晃司は心の底からため息を吐く。顔を捻って後ろを見れば、そこに居たのは紛れもなく晃司が助けた少女だった。昨日よりは随分元氣そうになったことに安心しつつ、手にある包丁が自分に向けられていることに、晃司は困惑する。

「なんで包丁を向けてくんの……？」

両手を上に上げつつ、晃司は少女に尋ねる。それに少女はイラついたように答える。

「そっちが最初に私を狙ったんでしょ！ 一体どうゆうつもり！」

晃司は少女の必死さに、心の中でため息を吐く。少女が根本的な所から勘違いをしていたからだ。

晃司は少女の目を見ながら、誤解を解こうと試みる。

「一つ、オレは昨晚、倒れた君を保護しただけだ。君の敵じゃない

……」

「……証拠は？」

「……ないけど、とりあえず君が狙いなら、看病はしないし、見張りもなしに部屋を開けたりしない」

晃司は自分の行動の疑問点を挙げつつ、少女の状態を観察する。

足は震え、息も荒い。無理をして動いたツケが来たようだった。

「信頼しても大丈夫なの……？」

「まあ安易に信頼するのはどうかと思うけど、信用くらいなら問題ない」

晃司がそう言うと、少女は包丁を持った手を下におろす。晃司はそれを確認すると、少女の手から包丁を取る。警戒で顔を緊張させる少女を安心させるために、近くにあつた勉強机に置く。

少女はそれを確認すると、体から力を抜く。晃司は慌てて、倒れる少女の肩を掴む。

「風邪なのに動くからだ……」

晃司はそういつつ、少女をベッドに横にさせる。晃司は少女の体思った以上に熱を持つてることにため息を吐く。

「捕えられたと思ったから……」

少女は辛そうにそう答える。晃司は少女に布団を掛けると、近くに転がっていた椅子を引き寄せる。

「とりあえず寝て起きたら、現状の説明な」

少女は晃司の言葉に小さく頷くと、すぐに眠りについた。

3

少女が起きたのは、もう日が傾き始めたころだった。

晃司は一睡もせずに居たため、眠い目をこすりつつ、少女に気を失ってからの経緯を話した。

「風邪になって、熱も上がった君を保護した……これはもうわかった？」

「うん……とりあえずあたしが勘違いしてたってことは……」

申し訳そうに、小さな声でそう呟く少女に、晃司は言う。

「随分と物騒な対処法だったけど……君はどんな組織に追われているの？」

晃司はあえて、だれとは言わずに、組織と言った。少女が晃司の推測どうりの人物ならば、まず個人に追われることはない。追われたとしても、後ろに大きな組織が存在するはずだ。

「……言えない。あなたを巻き込めない」

「そう……けど、たぶん、もう手遅れだと思う。ここは、君の家が経営してるマンションだし」

晃司はそう言いながら、少女の目の動きを追う。動揺で目が揺れ動いた。

「私の家が経営って……」

「嘘は通じない。」真藤”さん。真藤会の組員が君を総出で探してる……まさか家出って落ちじゃないだろうから、君は敵対組織に襲われたつてところ？」

晃司はそう言うのと、ベッドの端で充電中の携帯を指差す。

「勝手に見たの！？」

「まさか。待ち受けただけだよ」

晃司は肩を竦めながらそう言う。だが、それだけで少女が何者なのか、晃司にはよくわかった。

「極道のお父さんとツーショットはさすがに……年頃の女の子の待ち受けにしてはちょっと……まずくない？」

「あたしの勝手でしょ！ 大体、あなた何者？！ 手際が良すぎるわよ！」

晃司はそう言われて、数秒目を瞑って考え込む。そして一言呟く。
「大迫高校一年、室井晃司……これじゃダメか？」

「答えになってない！ 推測もそうだけど、服を変えて、ベッドに寝かせて、朝まで看病。しかも見ず知らずの人間を！ あんたは本当に何者？」

晃司はそれを聞いて、人差し指を一本立てて、一言いう

「……服を着替えさせたのは、適切な処置だから、あんまり怒らないでくれるとうれしい」

「……死にたいの？」

晃司のは頭の中で一瞬、自分が東京湾に沈められるビジョンがよぎる。

リアルすぎて洒落にならないことに気がついた晃司は、顔をひきつらせる。

「あゝ……命を助けたんだし、今回は見逃す方向で……」

晃司がそういうと同時に、晃司の携帯が鳴りだす。晃司は携帯を開くと、困ったように頬をかく。非通知設定だったのだ。

「まいったなあ。このタイミングでか……」

晃司は鳴り続ける携帯を嫌そうに見ながらも、とりあえず電話に出る。

「もしもし」

『お嬢さんに変われ。そうすれば命だけは助けてやる』

低い声でいきなりそんな事を言ってきた相手に晃司は言い返す。

「……まずは名乗れ。あと、娘が心配なら自分で来いって会長に伝えとけ。何十人も送り込んでくるよりはよっぽど誠意がある」

『子供が調子に乗るな』

男のその言葉と共に、晃司の部屋に黒いスーツを着た人間たちが押し入ってくる。

晃司はその男たちに抵抗する間もなく取り押さえられ、銃を向けられる。晃司はため息を吐くと、体の力を抜いて、やられるままになる。

その男たちに取り押さえられた状態で、目隠しと耳栓をされ、視覚と聴覚をふさがれて、晃司は男たちに連れ去られた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8060q/>

D & M

2011年2月17日00時11分発行